

玉城博司知事インタビュー

辺野古「自分事」と捉えて

戦後七十四年をへた今、戦争の想起を語り難い立場から「沖縄から平和を發信し続ける」と訴えた。米軍大間飛行場（宮古島市）の名護田辺古への移設阻止に向かって、「全國の人々「吉野里」と呼んでほしい」と呼び掛けた。主なやりとりは以下の通り。

（西原千一・平田赳氏 記憶回顧）

平和の音楽が遠れ世に出でて繼承していくといい。與じていむぞ。そ

卷之三

立地の切口

興も追い求む

も競争したが、今、田舎町では、
政治家がいよいよ、政策ではなく、
区の創出や小学校の学生が大統領
として選ばれるなど珍奇な現象が
起きた。年間予算は、財政監査院
によって、年々減額され、財政監
査院が監査院のための対応の場
をつくりだす。

基盤問題では政府との対立
が続いている。

二十回目の方へ

日本では「経済復興」と
「日帝の『対外』の問題が

じつに、日本に中華が復活す
るだけに、日本に中華が復活す

■ 白立型経済

獨立型經濟

■ 共感全国へ

で表現規範への反対運動が沸き上がった。当時SD連携委員会は、国連文書を抑止するため、本部で開かれた会議で、日本と米国との協力合意だ、その結果が今の基地が集中する沖縄で、統領とブルードーサーで家や田畠を奪われた原爆の苦い経験を一度も繰り返してはいけない。新しい基地は受け入れられない旨を繰り継げば、政府は「四時古が唯一」の解決策と認めた。多くの国民の同心をもとに腰を下していく。資格者の四分の一が辺野古に「反対」と答えた。

そのおかげで県民はよしよしと自分なりに振舞計画を立てる。自ら利害関係を察しているので、もう少し待つ。今はまだ長い。七年間で、ついでに余った土地開拓収入は、今余った土地が返還されれ、そのまま今までに減った。今はまだ余りまでに減った。しかし里山用地が返還されれ、その土地を活用した方が経済、雇用効果を何十倍もする。沖縄の自立型経済構築のためにも、長い期間の返還を認めねば

平和も経済振興も追い求める



平田浩二総務局長のインタビューに応じる
福岡県の玉城デニー知事=19日、中日新聞社で

A wide-angle photograph of a large auditorium or hall. The floor is covered with rows of small tables and chairs, all occupied by people. In the center of the room, there is a stage area with a whiteboard and some equipment. The ceiling has several recessed lights. The overall atmosphere is that of a formal event or lecture.



「地方自治の危機」名古屋で訴え

沖縄県の玉城デニー知事が19日、名古屋市公会堂（同市昭和区）で講演し、米軍普天間飛行場（宜野湾市）の名護市辺野古への移設について「（移設に）いくらかかかり、完成がいつなのか全体像を示さないまま工事を進めていい」と政府の姿勢を批判しました。

玉城氏は講演で、沖縄県が辺野古沿岸部の埋め立て承認を撤回したことへの対抗措置として、かねて撤回の効力を停止する手続きをとったことに言及。「さまざまな知事権限をもって、工事を進捗率が2.4%にとどまっているといううえ、沖縄県独自の試算を公表した。この日は約780人が聴講し、講演のほかパネルディスカッションも開かれた。

投票率は約52%で、反対賛成は投票総数の七割弱。ほつきの国が示された、「紳士の民選と寄り添う」と叫んでいたやうだが、本当に実現したかは疑問である。日本を監視する立場ではあるが、その監視は反対されていない。日米開拓使は、元老院議員の三者による監視をもつて必要があるといい、政府にも強いて申し入れていよい。

たのが、たゞ五日後には、私はすすむ米軍車両
地を運搬撤去されなければならぬ。それで、
ない。」田米袋装も需んでいた。
十年も前から陸軍の紳士の中では、せせめ
の車輌が廃車になつたが、なぜせせめ
のかうな、一人の国民として、
せらうとせらうとしている。

一政治馬鹿の伝業、左近がされ
るものがいた。

「イヤオホー」と云ふ言葉を必ずいふ
使いこなす。自分で「自分」になつ
た翁翁難敵前半身。私は「請う
あるを頼む」といふことを間違
続けてくる。これがお前輩奈良井
「土地を渡さない、自由を獲ら
ねえ」といふを表現する「左近」
だ。翁翁は「経済をひき取
かにして、いわば「請うて」要す
しなし奉る両方」一緒に
くべきだ。しかし、政治論争は時
分、いやでやがてにこして、
大きなマセーナジードになつて、
車両を運搬する車両を流れる
中から出でた翁翁は、少くとも、
車両は大きだ。その歩みを、
もじめて、若じ生れや興外の、
にも純粋の問題は「問題」
して握らうものもなかつて、左
からも腰痛を覺えていた。

190820 中日新聞 10